

棄てて忘れた故郷の、  
古いかすかな思ひ出に、  
芒の路がありました、  
夕日の路がありました。

(令女界 3 | 6)

## 泉のうた

泉水

うららかに渦紋をうみ、  
渦紋

うららかに溶けてゆく。

秘泉のほとり草のうへ

新樹のかげに君が涼傘

二人をつつみ護りけり。

涼傘

うららかに日をすかし、

日は

うららかに長けてゆく。

(令女界 3 | 7)

## いつわり

忘れよう、とおっしゃったとき、  
わたしは哀しくうなづきました。

○けれども、あれは嘘！

どうして忘れてしまへませう。

あの丘がおぼえてゐます。

あの路がおぼえてゐます。

あの青い空がおぼえてゐます。

いえいえ、

たとへみんなが忘れてしまつても、

わたしひとり、

わたしひとり、

忘れません 忘れません。

(令女界 3 | 10)